

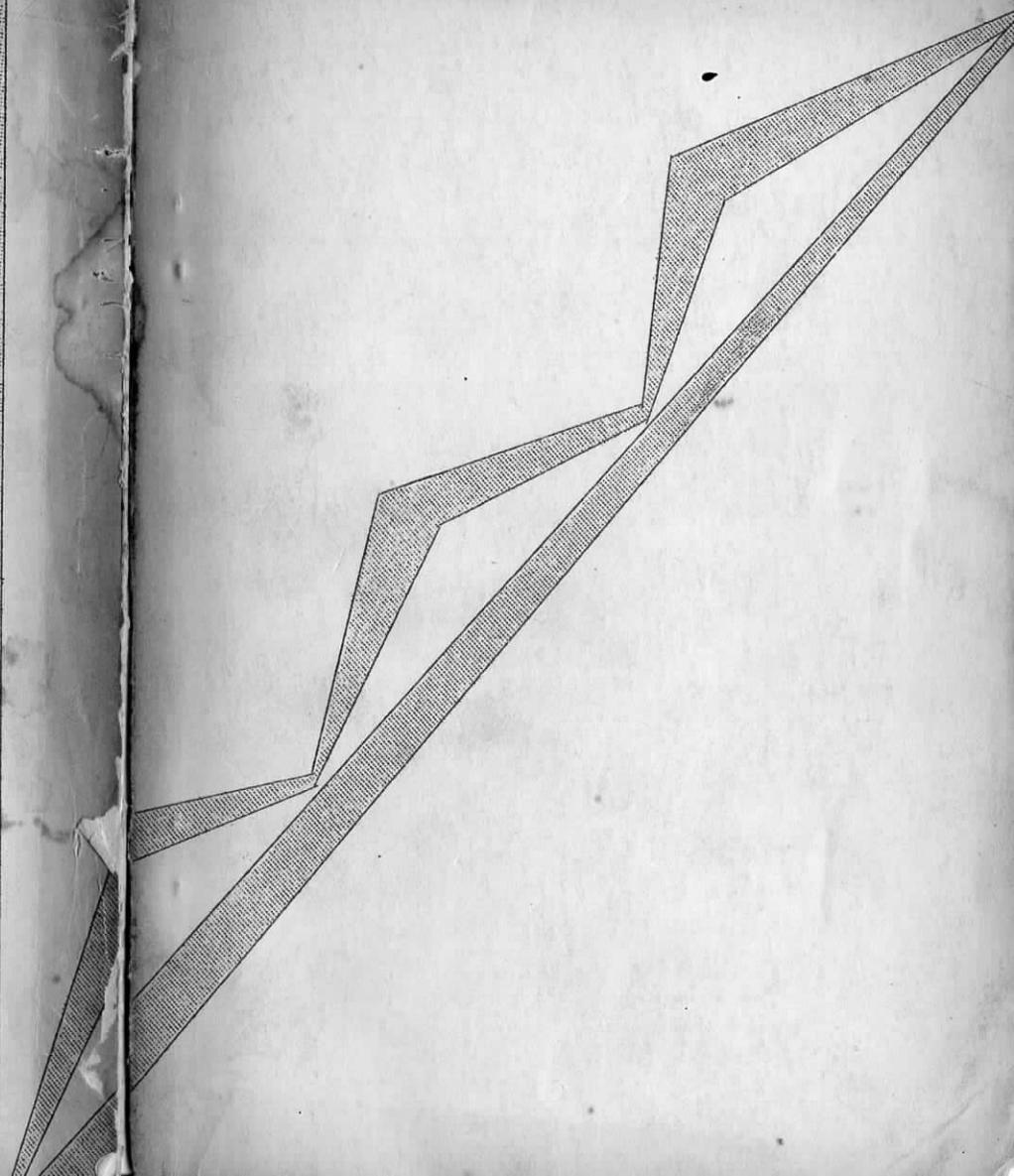
アナーキズムの原理とその史観

人類史観概要

『附』日本史

長谷川

武



序 文

人類の歴史を考える時、その主体性として、人間性そのものを、把握することなしには、史観としての根源を喪失することになる。

これは、人間そのものの歴史であることの、当然考えられねばならぬことなのであり、人類に対する観察が、何ものよりも優先して人類そのもののために、広範な意義に於て考察されると共に、自身人間であることの普遍性を認証するものでなければならぬ。

これは、言葉をかえて言うと、飽くまでも人間主義的な立場に於ける、史観の構成があって然る可きものと思う。

人間性を尊重することは勿論、理論の基点が、人間であることの証しを立て得なければならぬ、と共に、その説明にもなり得ることである。

人類は、人間と云う万生物中の特殊性を意味する、人類と云う「種」によって成り、その社会も文化も、その種の特異性に於て発展し進化した。

この事実を肯定することなしには、その史観の構成はない筈であり、そのためには、ダーウキンの進化論・「種の起源」は、丁度、前近代的な唯物論と同じ轍を踏む、一元的な非科学的誤謬を犯していると云える。

生物は、それを構成する細胞や元素、微粒子は多種多様であり、その「種」の起源は一元の進化又は変移ではなく、無限数を底位に、無限数を包含した綜合の一が、一切の原理の基点になつてゐる。

人類と云う「種」は、それを構成する微視の世界に於て、その素因は、微粒子と細胞の、各々その群結融合によつて成立し、結合の構成と云う基本に於て、人類と云う「種」故の、特殊性のもたらすものでないと云い切れるであらうか。

私は信ずる。人類は、人間と云う特殊な「種」によつて成り、その社会も文化も、その「種」の特殊性に於て、発展し進化したものである。と。

だから、猿そのものではなかつた、唯猿に近い生活形態の、經驗を持つものであるに過ぎなす。

ここまで書いて来て、これは序文にならず結論になりそうだ、と思ひ直し、この人類史観概要を書くに至つた、動機や経過を序文にかえて記述しようと思ふ。

憶えば、私が数え年一十五才の初秋の頃であつた。今から数えて三十七年前の事である。

当時の私はアナキストとして、農民運動に小作争議に、あるいは部落解放運動労働組合運動、社会運動に、思想団体の一員としての行動の日が続き、労働、放浪、監獄の日常であつた。

そうした或日、この日私は前橋刑務所の独房に、音と云えば、自身の脳波だけを聞く、面壁の時を過ごしていた。

そんな某日、むさぼる様に読了した、「無門関講義」をいつとなく反趨していた。

と、突如、閃光に似た啓示と云うか、ひらめきが私の全神経を強撃すると共に、名状しがたい一種爽快な明るさが、私の心を襲ひ、思はずも興つた軽々とした想念の底に、明快な一点を教えた。

それは綜合の一を美の極致とした、融合の真理であり、連帯性による連合の一体観であつた。

仏教哲学でいう、五大化（仮）和合が、土、水、火、風、空、の綜合を指し、土（固まる性質）、水（湿気のある性質）、火（暖たたまる、熱そのものの性質）、風（動く、変化そのものの性質）、以上の時間的存在と、空（空間）、等々の群結融合体の「一」を指示する、綜合一体観の世界観であり、現代の様な科学用語のなかつた時代での、色界（現象的に見える世界）、無色界（現象的に見えない世界）、を一貫する綜合原体、の实体だと云うのである。

即ち、原子、微粒子の融合を和合と云う言葉で表現した、綜合の哲理であり、一微塵の中に、無量の仏性在于し、と云う原理の直感でもあつた。

それ以来、不思議な程の明快さで、快刀乱麻を断つ思念を生み、その時まで疑惑を持っていた一切を、絵解きの様に解いていった。

クリスト教神学の造物主的哲理や、日本神道、仏教、等々の極限の類似と、現代物理学理論の到達点との同一性などであり、マルクシズムに対する批判も産れた。

こうした思想的な確立が、次々と秩序ある方向を辿った。

それが、筆もペンも紙もゆるされない頭の中に、構図となつて（別とち）権力史五千年を描き出し、牢獄備え付けの箱膳に、作業用の針で、始めに内部、底部に其想念を書き、出牢の時は全面に及んだ、それが総合史観を基盤とした、総合哲学として、私の哲学観に基点を与えたのである。

その後、牢獄を出てから間もなく、原子崩壊、原子変換説が、確かなことは憶えていないが多分、一九二八年か三十年だった、新聞紙上に報道され、絶対の「個」はなく、総合（群結融合）の「個」こそ、一切の素因であり、個性の発生をも意味するものと、私の思念を基礎づけ、科学、特に素粒子論に、魅力と興趣とが湧き、私なりの研修を続ければ続ける程、確信を深め、それが、私の哲学観の根柢を揺るぎないものとして、形ち作つていった。

が、第二次大戦終了までは、頭の中に刻み込んで置く以外に方法がなく、書いたものを

残せば危険であり、いつでも、牢獄が口を開けて待つていた時でもあった。

やがて社会運動に牢獄に、寧日なく、苟忙の間に青春も過ぎ、終戦を迎えた。

その後、平民新聞を持ち、ブラカードを胸にさげ、街頭や列車内で、主義の宣伝に日を通す時、そうした多忙な或日、横浜桜木町の駅頭に立って、デット街頭を往く人々を眺めながら、演説を終えた後や、瞬時の暇をみつけては、参考書もなく、思いを練つてはメモし続けた。

それと、その後、湯川理論や藤岡由夫氏の著書、その他考古学、史書、雑誌、新聞、等々からの啓発を受け、それを参証し、書き続け、文面を修正したり、何回となく書き直し、加筆し、それで出来あがったのがこの書の原文であり、一九五九年の晩秋だった。

なお現世代の史観が、現代科学としての物理学、特に量子力学に於ける素粒子論によつて、解釈し得ない様では、所謂科学性を喪失することにもなる。

と言う事は、マルクシズムに十九世紀的な、古典物理学を根柢に仮定した唯物史観があり、今になお、核分裂、核融合以前の、古色蒼然たる理論を信奉する人達への警告と批判とを兼ねて、記述したいと思うからでもある。

振り返えて見れば、三十七年余に及ぶ今日までの年月を、何回となく読み返えしては加筆訂正し、あるいは頭の中で、研鑽し修正し、書き続けた。なお此の史観が、考古学的

に実証し得るかどうか、と学生と共に十余年間、縄文彌生遺跡を採掘し学修した。そして、一九六五年十一月ガリ版刷りを発行、その後さらにこれに加筆して、これでもうよかろうと、筆を擱いたのが、一九六七年九月末日であり、第一回発行となったが、その後不備の点が気になつてならず、修正加筆して、現在再発行することになった。その間、私なりに、論理は実感に密着して、成熟し発展したと思う。この一文が一つの提案として、諸賢の御批判を乞うと共に、それを素直にかつ謙虚に受け入れ、自己批判を惜しまないことを、序文に書き添えておきます。

一九七〇年三月

長谷川

武

人類史観概要 目次

(綜合哲学の提唱)

序文	3
綜合史観概要 前文	11
一、個性の発生	12
二、史観上の動物的特殊性	19
三、史観上の人間的特殊性とその個性	20
四、史観に於ける本能論的分類	29
(イ) 自己保存の本能	29
(ロ) 種属保存の本能	30
(ハ) 好奇本能	30
(ニ) 社交性本能	31
(ホ) 相互争闘は本能そのものではない	35
史観	39

一、本能論史観としての概要	39
二、意志による創造としての史観	44
三、経済事情に左右された史観	57
四、支配と被支配の反覆としての史観	74
五、滅亡するものと創造するものとの史観的分類	83
六、総合史観	88
七、結論	93
相補性原理	95
相対の融合と対立の統一	97
市民運動と水平思考	102
『註』	109
『附』権力史五千年史図	111
『附』日本史	113
序文	113
一、縄文時代の精神文化	116
二、彌生時代の帰化人文化	132
後記	154

綜合史観概要

前文

現今までにあつた英雄史、宗教史、唯心的に見た史観、近くは弁証法的唯物史観、又はダーウキンの種の起源、等々に対し、私流儀にいうと、人間史観ともいう可く、群結融合の一という、素粒子論を基礎とした綜合史観なのであるが、それには先づ、人間とは果して何であるか。

それは四大本能¹、自己保存、種族保存、社交性、好奇、からなる創造的意欲を持ち、併も余義なくされていて、その行為が可能な、意志し、意識活動する特殊な動物である。という事が基本的に強調され、その生体は、人類蒼生の当初に於て、すでにその「種」としての生體であつた、とする有機体としての根元を史観発展の基点とすると共に、この特殊の存在である人間も、死ぬ事によつて、この肉体を構成する、九十八種その他、新原素を加味した原素に還える。

即ち人間と云う特殊性を失う事から成っているのであるが、そのいづれもが、生物は生物として、各その独立と差異と特殊性の内に、共に唯物論(この基点は古典物理学)のみ

では説明し切れない、作用量子や不確定性原理と、相補性原理を持っているという事、と同時に、共通性とか普遍性、類似性をも見てゆき度いと思ふ。

要するに、現代理論物理学上の素粒子論的基点のもとに、この史観を發展せしめようとするものである。

一、個性の発生

通常、物質とは九十八種、それに新元素分子を加えた多くの分子からなり、その分子は各々特殊な原子によつて構成され、その原子は、共に独立した陽子と中性子からなる核と、同じく独立した特殊体である、電子及び中間子、反陽子、等々の集団同時活動体である融合の「一」であつて、その中の中間子そのものも、無限の数の群結融合の一という、特殊の「一」といえる「場」である。(註、湯川博士の「非極処場の理論」参証)

要するに無限数を加味した、微粒子の群結融合の一角原子であり、その中の一種である「電子の数」の差異が、原素分子に差異を生ぜしめ、各原子の個性と独立をもたらずのである。

この総べての「個」を構成する因種である原素は、中性子、中間子、陽子、反陽子、電子、等々の微粒子の群結融合に依つて成立する原子に依つて、構成されるのであつて、巨

視的現象の「個」も、微視的現象の「個」も、それ等を一貫する普遍的原理は、「融合の一」、即ち綜合の一と云う「場」を意味し、この範疇を出でない。

このように無限の数を加味した融合の一角、万物万象の基源的形態であり、小は中間子を一つの「場」としての構成から、大は草木、人間、地球、宇宙を通じて、共に無限の数を加味した融合の一であり、確立された、個性ある「一」と云える「場」の普遍的実在である。

なお、この個性ある「個」の各々が、相互に常に融通無碍(自由聯帯性のもとにある)であり、一定に止まる事のない、流通自在な流動によつて組織構成されている。

あたかもこれ等は、鉄、石灰、その他多くの物理学上の物質の要素が、あらゆる生物の中に、飲み、食ひ、吸ひ、その他種々な縁由によつて融合溶解し、生物を存続せしめてゐるのと同様であり、併もそれ等の物質や、生物そのものも、放射性原素や、空中に無限に存在する、宇宙線、中性子、その他の久遠に渉る流動性を持つ実在に融けて、変化し、結集し、破壊され、一となり多となり、分離し、群結しつつも、常にそれ等を一貫するものは、融合の一と云う、独立した「個」である。

これ等は、群結融合の一という「場」の形態を持つてはじめて、鉄は鉄、鉛は鉛、錫は錫、としての個性を持つ事であり、この個性ある多くの原子の群結融合の一角、原素、分

子であり、最も微少な独立した個であるが、こうした原理に基づき、多様な独立した個性ある物質が、群結融合して「一」となり、巨視的に見た物質―生物をも含めて、人間、星地球、宇宙の一切を貫ぬく多様な独立体となり、しかもその個々が、不即不離を連帯性のもとに融合し合い、一つの「場」としての独立体になっている、と云うその事が、基源的な共通点なのである。

これは原子の内部構造に於て、素粒子相互間が、対立関係や、矛盾（対立）の統一と云うようなものではなく、あくまでも個性的な相対を意味し、磁場のような連帯性による共同体であり、同時活動体を意味する。

これ等は、量子そのものの構成と状態の仮称であるに等しく、と共にその実体を意味し、共通するものである。

即ち群結融合の一と云う個性の構成原理は、中間子から原子、分子の微視的現象の個性ある独立体へ、そして、草、木、石、人間、地球、宇宙に至る巨視的現象にまで、独立と個性を持つている事が解ると共に、各その個性ある独立体は、個性差と云う、特殊性による、分類も可能でなければならぬ筈であり、一切のものに、特殊性を認める事なしには、如何なるものの解明も、不可能であると云う事が出来る。即ち電子は電子であり、陽子でないことは勿論、その他の中間子、中性子、反陽子、等凡て一つの個性ある独立体なので

あり、素粒子対素粒子の関係は、非中心化された。群結融合体であり、主体なき融合体であると云える。

この理由から、最も其差違の判然とした特殊性について、無機物（物質）と有機体（生物）とがあり、その内、特に動物の持つ種性は、その発生に於てすでに単細胞、細菌類の様な、微生物であり、アミイバー、カビ、バクテリア等であり、併もそれ等は、各独立と個性を持つ多様な生物的分類の上にたっている。

木は木、草は草であり、これは生物であるそのために、鉄や石と異なる発生の歴史があり、生物、特に動物は其形成の当初に於て、独立と個性あるアミイバーによって構成され、群結融合の一と云う「場」、部分を意味する心臓は心臓、肺は肺、脳は脳を構成する要素としての特殊な、個性ある独立したアミイバーの群結融合によって作られ、それ等の各個性ある独立した部分の、連帯性ある群結融合の「一種」の動物を構成するのである。

心臓は心臓としての、個性を持つ細胞の集団同時活動体なのであって、生物学的な実験に於て、細胞がある程度の時間的経過で、一定の数量と質量に生育されないうちは、その機能を持つことができないことを、実証している。

これは、日本の大山椒魚の卵の培養実験で、その心臓が動き出すためには、育成と云う細胞の増大と時間とが必要である、と聞いたことがある、と云うことは特殊性としての細

胞の培養が必要不可欠であり、この点が人為的に可能ならば、原子病の小頭症や其他の治療も、細胞の培養によつて可能になるのではないのか？ 又他の患部に対しても、解倍切除して他のものをしょくしゅするのよいことではあるが、こうした治療法が考えられてもよいことのように思う。これは解倍切除する場合、その部分の成育を見込んでの一部別出は、医療法としての一つの方法であるかも知れない。

こんなことが云えるのは、まったくの素人なればこそ、云えることかとも思うが、要は集団同時活動体としての究明があつて、始めて真理の究明がなし得る、と思ひからでもあ

る。

時間（環境）と数と量と質との合成（融合）が、ある種の定数量に達しなければ、活動体としての機能は働かない、即ち孤立した個には、生育の実体がなく、連帯と融合の個に、始めて生物の実体がある。

これは環境と数と質と量に於て、個々の変革が可能ならば、異なつた意義での融合の状態が産まれることを、教示するもの様に思える、又これは人間社会に於て、民族の発生や、社会状態のあり方にも共通する所があることだと思ひ、特に質に於て不適なものを、除去しつゝ改革することの可能性が考えられる、即ち発展し進化した人間の歴史は、これを原始、古代、有史の各時代別に、実証して来た現今の人間社会がある。

病巣（質）は常に育成を背景に別扱しなければならぬ、と共に、健全なる部分は常に倍養し育成しなければならぬ、これは人類史が描いて止まない、人間各個の持つ使命であり、又人間に荷せられた創造的な事実として、民族の持つ美や、精神的在り方に求められるものでもあろう。

又、素粒子論的に云える作用量子としての、特殊な本能と血と意識活動とが、それ自身独立体の如く連帯性の奥に交流し、併も主体に等しい部分的な位置をも占めて、生物としての機能を發揮している。

以上を思ひ時、生物特に動物は、アミーバーの個、又は群結融合の一として発生した、細胞分列又は多数融合による、歴史を持つものと断定し得るかと思ふ。

このアミーバーを種数別にすると、現にある生物学、あるいは動物学、細菌学によつて実証されているように、独立、同種、異種、変種、等々実に多様な、しかもそれ等の各々が、個性の独立を持つアミーバーの、無限とも云える数量を見ることができ、なお一細胞の中には、十万以上の抗素のあることもすでに実証されている。

これ等は、独立と個性と云う、特殊の蒼生としての起点がここにあるのであつて、蟻は蟻、猿は猿、人間は人間であり、各々その構成部分を占める細胞の持つ特種性、又は性染色体、其他の「種」の構成分子である、アミーバーの多種多様な事で解ると共に、そのア

ミーパーを構成する物質的分類に於て、細胞の原形質及び細胞液そのものにまで遡つて、それ等の持つ素粒子の質と量が、蒼生の当初に於て、すでに個差のもとに成立した、異態的独立体であつたことの証明と云える。

目は目の独立と機能のもとになり、心臓や肺と同一のものとは云えない。

要するに、各原子の構成要素が異なるように、素粒子論は実証する所であり、それと同様な例を、生物学的にも実証されるものの様に考えられる。

ではこの動植物の発生は、ダーウキンの種の起源で云うように一元であらうか？

水棲から水陸両棲へ、そして陸棲、飛行性とかくも順序よく進化したものであらうか、この基本的にある独断と誤りはどこにあるのか？

地球の冷却は一樣ではなく、寒、暖、冷、熱、水、陸、高、低、深、浅、乾、湿、等々は一様、一時にできたものではなく、又その度合の相違や万化万様の発展変化があり、その中に、各地域、地質の異差による種々なる発生起点もある、樹木や昆虫としての発生と、動物としての発生は自づと異なるのであり、それに準じた細胞の発生を思考することがなかつた、即ち群生と特殊の多元性を思うことのなかつた、単一的見界の謬理としか思えない。

二、史観上の動物的特殊性

動物万般に共通するものとして、多少厚薄の差異はあるものの、四大本能（自己保存、種属保存、好奇、社交性）があり、これは同じく生物である、植物界にもその類似現象を見る事は出来るが、その植物界との決定的な相違点は、動物は任意に意識活動をなし得る事であり、頭腦的動作を作用量子として持つ個体の運動がある事である。

即ち植物界との相違は、単細胞的構造の相違は無論の事、各独立した作用量子を含む肉体的構成の上に、頭腦的構造のある事である。

物質がその原素的分類に於て、多数に渉る如く、植物界も多種多様であり、昆虫動物も亦、各々その個性に多種多様なものがあらわれ、独立と個性を持続しつつあると云う事は、各々の特殊性に於て、存在そのものを意義あらしめていと共に、個性の差異を判然と維持している事である。

然も、この差異が大小無限の形態に加えて、意識活動そのものにも、深淺強弱、無限の差異を決定的な要素として、動物全般の個性に見なければならぬ、と共に、それが最も妥当なものとして考えられる。

即ち生物の、特に動物の「種」の起源は、一元ではなく多元である、と敢えて私は断言